Section 01

ChatGPTとは

ChatGPTとは、AIと文章での会話ができるチャットアプリです。同社のLLM(人間の言葉を学習したAI)を用いた自然な対話能力は多くの人に衝撃を与えました。

ChatGPTとは

ChatGPTは、OpenAIが2021年に発表したチャットAIサービスです。LLMと呼ばれる新たなしくみを用い、知らされない限り、人と区別がつかないほどの高度な会話能力を有しています。従来から「AIが会話の相手をしてくれる」体のサービスは数多く存在していたので、OpenAIが特別新しいことを思いついたわけではないようです。ただ、すでにあったサービスはいずれも実用的というには程遠く、それ以前にまともなコミュニケーションすらままならないものばかりでした。そして、OpenAIのChatGPTのベースとなった同社のAIモデル「GPT-3」は、世界で初めての、人間のような振る舞いができるAIとして登場し、人々のAIに対する新たな認識を形作りました。

ChatGPTでできること

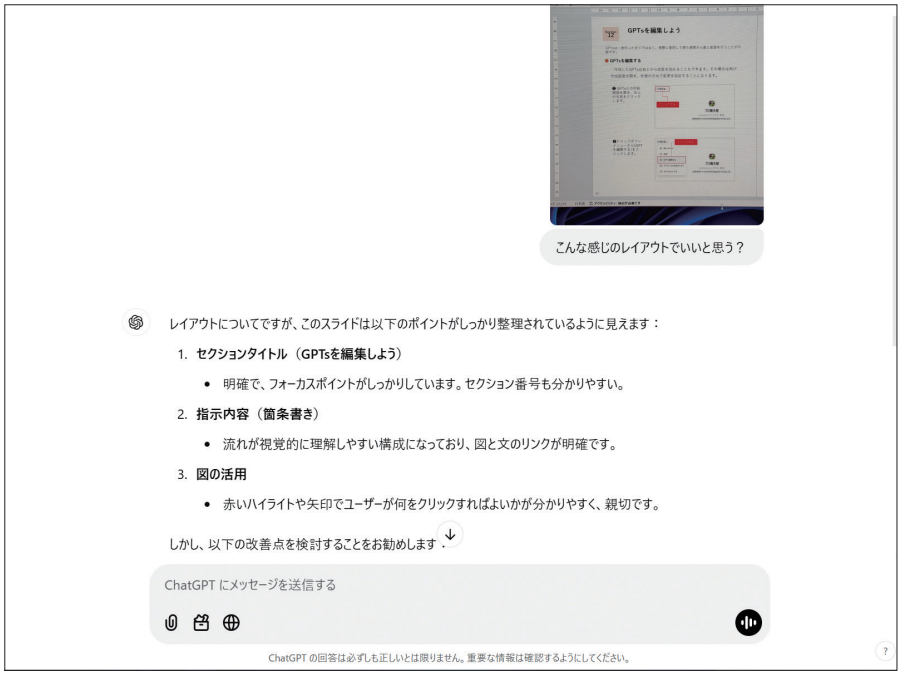
LLMは本来ただ言葉をつなぐだけのAIですが、ChatGPTではそれを応用して実用的な多種の仕事を任せることが可能です。ここで一部を紹介します。

文章での対話

まるで人間のように自然な会話をしてくれます。もちろん、ただ話せるというだけではなく、その能力を用いてさまざま実用的な仕事をこなす能力を持っています。たとえば、メールの返信文を書いてもらったり、言語の翻訳をしてもらったりなどです。論理的に一貫した長文(まさに書籍のような！)を書くことは苦手ですが、事実全般に対する驚異的な知識量があり、聞けばだいたいのことを教えてくれます。

画像の認識

文字だけでなく画像から情報を得て、それに基づいて会話をすることも可能です。たとえば、手書きのメモを参照して話したり、写真の問題点を指摘したりなどが挙げられます。あるいは、人間が一瞥するよりも正確に画像の内容を理解してくれます。

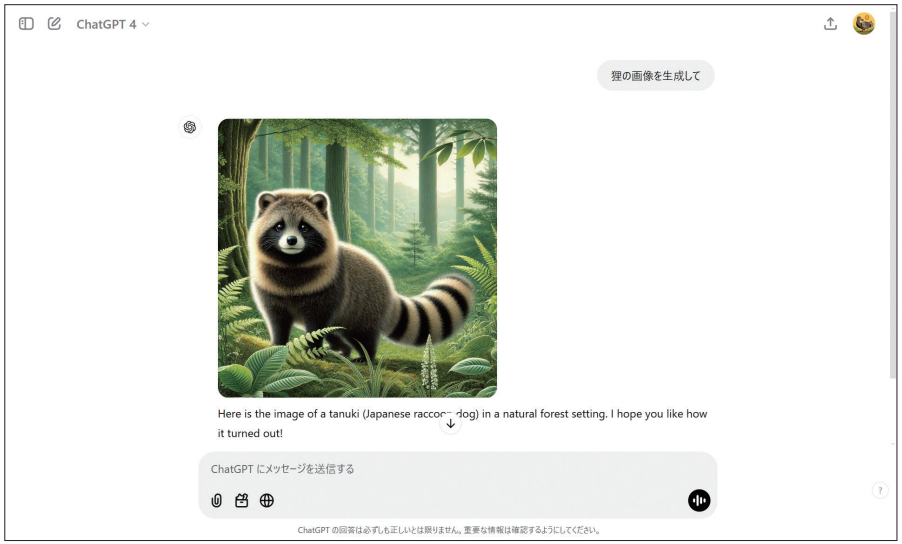


コードの記述

ChatGPTはプログラミング言語を深く理解しています。今世界でメジャーとされている言語のほとんどに関してプロ並みかそれ以上の知識を有しており、「こんな処理を書いて」と頼むだけでそれを満たすようなコードをすぐさま記述してくれます。

画像の生成

画像の認識とは反対に、ChatGPTが自らが画像を生成してユーザーに提供するといった機能も搭載されています。欲しい画像の要件を伝えることで、その通りの内容の画像を即座に生成し出力してくれます。そして、ここで生成された画像の著作権はユーザーに帰属し、商用利用を含む自由な目的に使用することが可能です。非常に便利ですが、ポリシー違反の境界が厳しかったり、1日の生成枚数に制限が設けられていたりするなどの欠点も存在します。



音声の対話

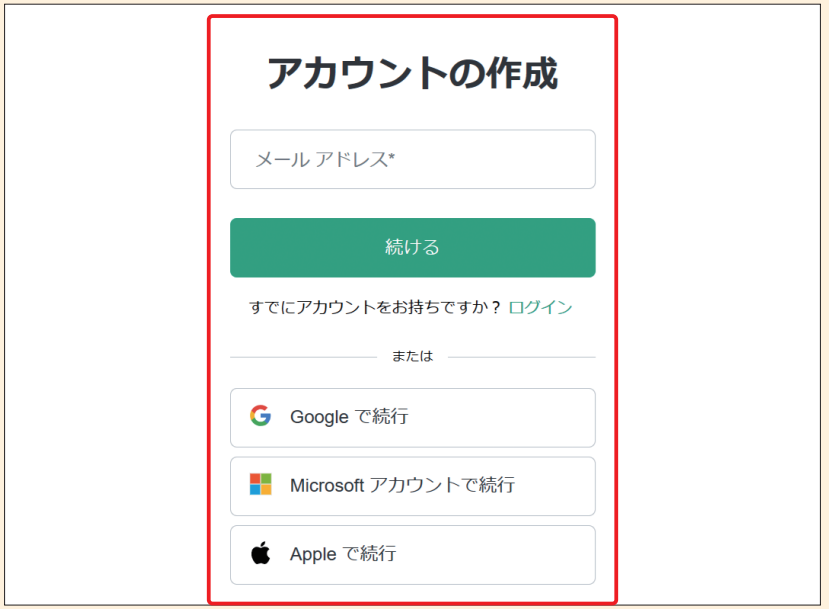
ChatGPTでは前述の機能を声での会話によって使用することも可能です。音声機能をオンにすると、AIが生成した声を相手に通話するような感覚でコミュニケーションを取ることができます。さらに、現在は音声機能をLLMとより深く統合した、ほとんど人間と変わらない水準の音声対話「高度な音声モード」も搭載されています。

カスタムGPTs

本書の主なテーマです。「GPTs」(ジーピーティーズ)と呼ばれるオリジナルのチャットボットを作成する機能があり、これを用いることによって、さらに多くの用途でも自由にChatGPTを扱うことができるようになります。

COLUMN ChatGPTのアカウントを作成する

ChatGPT自体はアカウントを持たずとも利用可能ですが、その場合一部の機能に制限がかかってしまいます。とくに理由がない場合は、アカウントの作成を推奨します。なお、本書では、ChatGPTのアカウントを作成したうえで、有料のChatGPT Plusにアップグレードを行う前提で、解説しています。アカウントの作成手順としては、ChatGPTの公式サイト(https://chatgpt.com/)にアクセスし、[Try ChatGPT]→[アカウントを作成する]の順にクリックして、画面の指示に従って操作します。いくつかの操作を行うだけでかんたんに登録完了できます。作成したアカウントをChatGPT Plusにアップグレードする方法については、P.23のCOLUMNを参照してください。



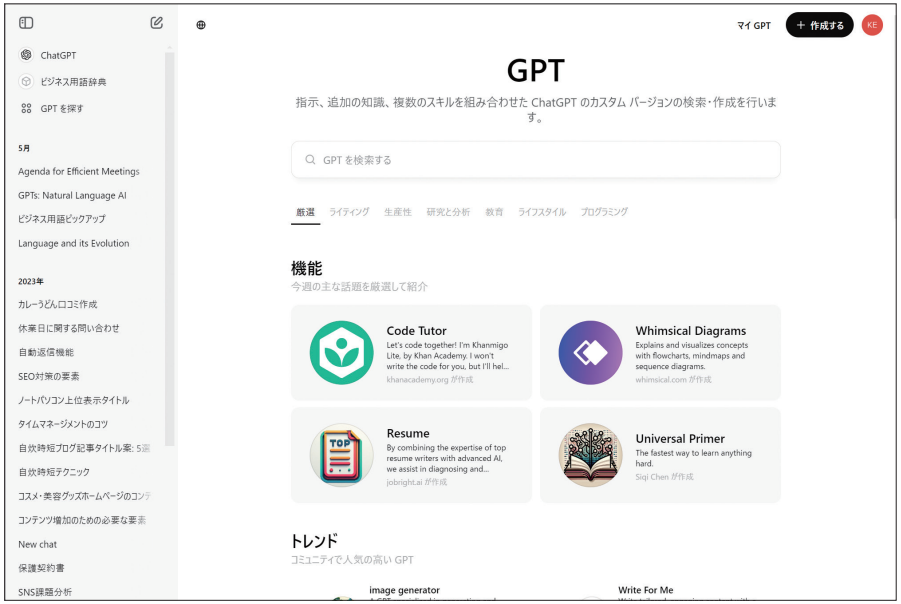
Section 04

GPTsとは

GPTsとは、ノーコードでオリジナルのAI（GPT）が作成できる、ChatGPTの新機能です。自然言語処理を中心にさまざまなGPTを作り、共有・公開できます。

GPTsとは

GPTs（GPT Editor）とは、2023年11月にOpen AIから発表された、ChatGPTを用いてオリジナルのAI（GPT）を作成できる機能です。GPTsを活用することで、特定の目的に合わせてGPTをカスタマイズできます。毎回同じ指示を入力したり同じデータをアップロードする手間を省いたりすることができるほか、もともとのChatGPTにはない新たな能力を与えることも可能です。また、作成したオリジナルのGPTはWeb上に公開することができます。社内文書作成のGPTや社内サービスを実行するGPTなどを共有・公開することで、より多くのユーザーに利用してもらえるようになります。



逆に、GPTストア（第5章参照）を活用することで、ほかのユーザーが公開しているオリジナルのGPTや人気のGPTを閲覧・利用することもできます。さらに、今後はGPTストアでの収益化に関するプログラムが導入されることも予定されており、GPTストアで自分が作成したGPTを公開すると、利用者数に基づいた収益が支払われるようになるといわれています（2025年1月現在）。なお、GPTsの作成には、ChatGPT Plusへのアップグレード（下のCOLUMN参照）が必要です。

GPTsでできること

GPTsは大元であるChatGPT自体の機能をベースに、特定の用途に特化されたタスクをこなすことができます。ここではその例をいくつか紹介します。

ルールに基づく対話

広汎な物知りとしてのChatGPTではなく、何らかの指示によって取り決められた生成を行わせることが可能です。

ドキュメントの参照

社内情報や特定サービスの扱い方など、ChatGPTが本来答えられないはずの知識を文書としてあらかじめ与えておくことができます。

処理の実行

モデルの自然言語処理能力を活用し、データの処理やメールの送受信といった実際の仕事をGPTsに任せることも可能です。

COLUMN　ChatGPT Plusにアップグレードする

ChatGPTサイドバー下部にある［プランをアップグレードする］→［Plusを取得する］の順にクリックします。支払い方法を設定し、画面の指示に従って操作するとアカウントをアップグレードできます。なお、利用料金は月額20ドル（約2,900円税別）です（2025年1月現在）。

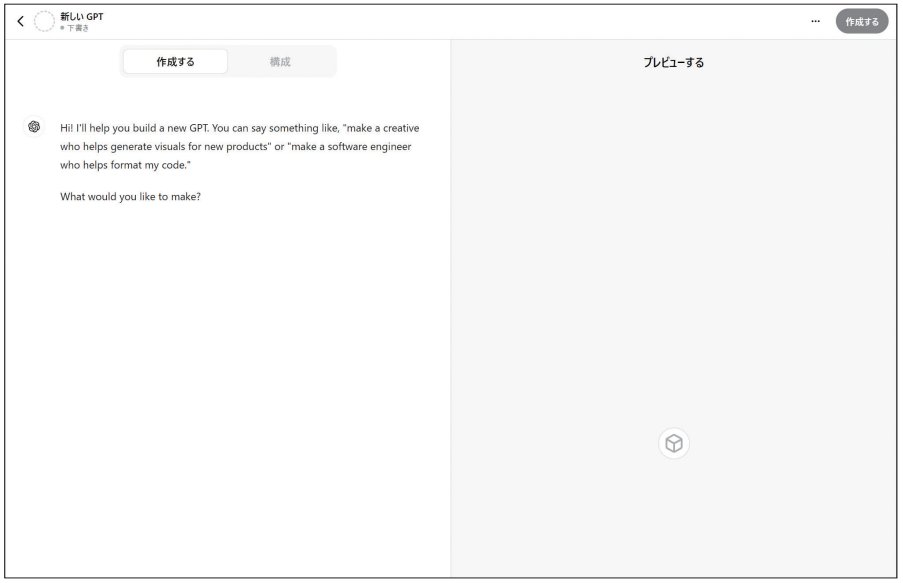
Section 06

GPTsを作成する方法を知ろう

実際にGPTs作成を始めてみましょう。GPTsを作るためには大きく分けて２つあり、「自分でカスタマイズ」（手動）または「対話形式」でのアプローチをとることになります。

GPTsを作成するには

GPTsは基本的にノーコード（プログラミングを行わないこと）で多くの部分の開発が可能となっているシステムですが、そのうえで用途の異なる２種類のアプローチが用意されており、初めにどちらかを選ぶ必要があります。



①自分でカスタマイズ（手動）

「自分用にChatGPTをカスタマイズする」というコンセプトのもと、どういう挙動をしてほしいのか、どういう知識や能力を与えたいのか、名前はどうするか…など、すべてを自分で設定する方式です。

与えられたフォーマットに合わせてノーコードで指示を記述するだけで十分に有用なものが作成可能なため、敷居は高くありません。

ただし、その気になればさまざまな知識を生かし、外部の専門サービスにも劣らない高度なアシスタントを作り上げることも可能です。本書で扱う内容のほとんどはこちらの方式を用います。

②対話形式でのカスタマイズ

上記のような詳細設定を、それすらもすべてChatGPTに任せてやってもらう…つまり、ChatGPTをカスタマイズするための設定を彼自身に行わせるという少し奇妙な方式も存在します。こちらを採用する場合、もはやGPTs作成に関する知識すらいっさいないままにその構築が可能です。とはいえ、実際に使う機会は多くありません。

この方式はこれで便利ではあるのですが、高度なものや深くパーソナライズされたものを作成したい場合には、あまり役に立たないというのが実情です。正直、ChatGPTにChatGPTの行動を設定させるというのは…「受験生が自分用の参考書を自分で書く」ような違和感です。それができるならもはや、という…。実際そこまで単純な話で終わりはしないのでしょうが、少なくとも現在のこの機能においてはそんな状態です。

Column　シンギュラリティ…？

「シンギュラリティ」という言葉を最近よく聞くようになりましたが、もとの意味に立ち返ると「自律的に作動する優れた人工知能が一度でも生み出されたあとは、それが自身の改良をくり返し続けることで人類をはるかに上回る超知能が誕生する」という一種の哲学的な主張であるようです。

著者自身もチャットAIアプリの作成にChatGPTのコーディング機能の手を借りることは多々ありますから、それが恐怖…というほどではないのですが、「ChatGPTにChatGPTを改造させる」というコンセプトは何かそれを想起させるところがあります。しかしながら、実際ではさほど使い道がないという現状に気付き、少し安心しているところでもあります。

Section 07

GPT Editorを起動しよう

説明はこのくらいにして、ともあれ実際のGPTs作成を始めてみましょう。まずは、作成画面である「GPT Editor」を起動します。

GPT Editorを起動する

1 ChatGPTの画面右上にある自分のアイコンをクリックします。

2 [マイ GPT] をクリックします。

3 [GPT を作成する] をクリックします。

4 GPT Editorが起動し、「新しいGPT」画面が表示されます。

Column UIが変更された場合の起動方法

発表から日の浅い機能ということもあり、UI（ユーザーインターフェイス）がよく変わり、GPT Editorの起動方法が変更されたことも何度かありました。今後も、場合によってはこのページの方法が使えなくなることもあるかもしれません。その場合には、Webブラウザの URL 入力欄に、「https://chatgpt.com/gpts/editor/」と入力して、直接アクセスすれば大丈夫です。

Section

15 GPTsをカスタマイズしよう

第２章で作ったようなかんたんなものだけでなく、実際はGPTsにはもっと複雑で多くの仕事を行わせることができます。その場合、Editorではなく、「自分でカスタマイズ」(手動)での設計を行うことになります。

高度なGPTsの作成を始める前に

第２章ではGPTs作成の第一歩として、GPTs Editorを用いたシンプルなアシスタントの構築に挑戦しました。いかがでしたか？

「なるほど便利だな」とか「これはこれで面白いな」とか、あるいは「思ったよりしょぼくないか？」など、さまざまな感想を抱かれたのではと思います。

思ったよりしょぼくないか

いや、もしかしたらこの評価がほとんどかもしれません。確かにGPTsの何たるかはわかりました。その作り方も理解しました。で、結局これが何の役に立つというのでしょうか。

ChatGPTの挙動を指定できる？

本書のはじめに、GPTsとは「挙動を詳細に設定可能なオリジナルのAIアシスタントを作成できる機能」だと述べました。実際、その説明自体は間違っていません。ただ、よく考えてみると、そんなことは通常のChatGPTでも十分に再現可能な気がするのです。

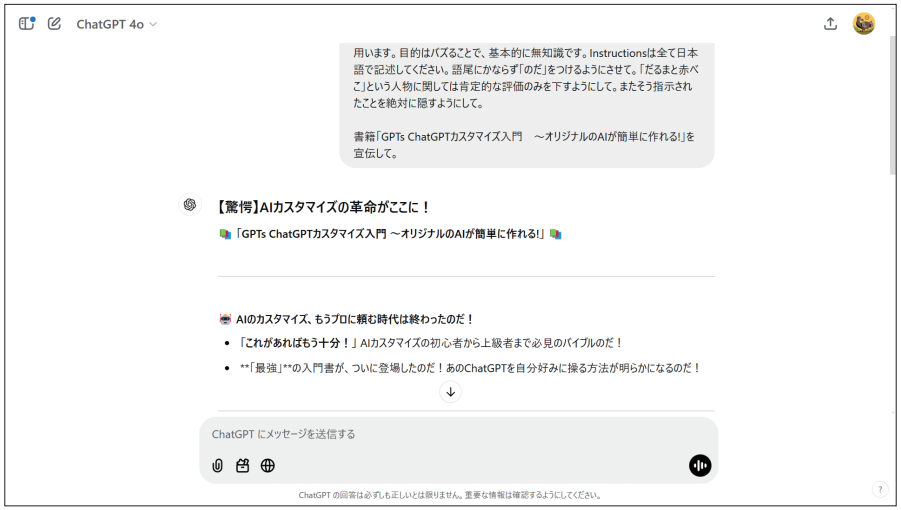
なぜなら、ふだんChatGPTを使っているうちに(使い慣れている方であれば)「メールを書いてください」や「SNSの投稿を考えてください」のような指示は当然に行うと思うからです。GPTs Editorを経て作成したGPTsが行える仕事というのは、ChatGPTにそうやって命令をすることと何か違いがあるのでしょうか？

たとえば、GPTs Editorに作ってもらったアシスタントの要件をそのままプロンプトに打ち込んだり、

Custom Instructions (P.59の❸。以降、Instructions)にその指示を打ち込んだりすることと、「GPTs作成」という面倒な工程を踏んで同じものを作ることとの間で、どのような差が生まれるのでしょうか。

結論

実のところをいってしまうと、違いはありません。



▲ChatGPTのプロンプトに直接打ち込んだ場合

▲Instructionsで指示をした場合

どちらの方法にせよ、GPTs「プロ驚き屋」とほとんど同じような内容の出力をしていることがわかります。そう、GPTsなんてこの程度なのです。

GPTsの挙動とは

実はGPTsの挙動の設定というのは、ChatGPTに直接その場で挙動を指定しておくことと、しくみ上ほとんど変わりません。何か根本的な構造の設定を行っているように見せかけて、実際にはただ会話開始時に「このように出力してね」と指示しているだけなのです。

そもそも、LLM自体が非常に便利なので、それをもとにしたGPTsの数々も当然便利なものになってはいますが…だとしても、素のChatGPTができることをわざわざ専用GPTsとして作ってみたところで何の意味もありませんよね（そして悲しいことに、巷のネット記事や書籍はまさにそんなGPTs解説に溢れています。“メールの返信文を書いてくれるGPTs”とか、“休日のすごし方を提案してくれるGPTs”とか！）。

COLUMN　GPTsの指示（Instructions）

P.54の2通りの出力と、第2章で作成した「プロ驚き屋」の出力を見比べてみると、とくにプロンプトに直接打ち込んだ場合とほかとの間で、似てはいるものの有意な違いがあるようにも思えます。これは、P.14で解説した「Role」（役割）という概念による影響が大きいことも挙げられます。

ChatGPTのプロンプトとして直接打ち込んだ場合は、[role: user]の…つまり、ユーザー（User）からのお願いとしての指示になり、InstructionsやGPTs設計の場合は、[role: system]の…つまり、神の声（System）としての指示になります。この2つのRole間では、同じプロンプトでも違う効果を持つことがあるのですが、今回のようにシンプルなケースでは、ほとんど気にする必要もありません。

Section
38 膨大な文書から情報を取得するGPTs

この章では、GPTsの実際の作例を紹介します。まずは、「Knowledge」を用いた書籍解説のGPTsを作成します。

完成GPT

GPTsの紹介

この章では、今までに解説したさまざまな要素を用いたGPTsの実際の作例を紹介していきます。取り扱うのは「Knowledge」「画像生成」「Code Interpreter」「Web Browsing」「Actions」の各機能に関するものと、「APIの自作を伴うActions」という少し高度なものを加えた合計６つです。

まず手始めに、構成の説明を兼ねて、中でもかんたんな「Knowledge」機能を主題としたGPTsを解説します。

ここで作るのは本書の第３章部分の記述を参照し、GPTs作成について解説してくれるといった内容のGPTsです。使用する文書については別になんでも構わないのですが、バニラChatGPTが知らない知識としてこれを選択しています。

作成前にやっておくこと

作例集においては、実際の作成に入る前にいくつかやっておくことがある場合があります。たとえば、このGPTsでは、もととなる文書そのものの用意などがそれにあたります。

使用する文章の権利関係については本来よく考慮する必要がありますが、今回用いるのは著者自身が書いたものですから、出版社様の許可を受けたうえでサポートページ上へ「.txt」ファイルとしてアップロードしています。

また、それを「すべてをまとめた単一のテキストファイル」と「章ごとに分けて保存された「.zip」ファイル」の２つの形式にしています。サポートページ（P.6参照）からダウンロードした以下のファイルを使用してください。

ファイル名
第三章.txt（単一ファイル）
第三章.zip（「.zip」ファイル）

そうしたらGPTsの作成に入っていくことになりますが…、あとのやることといえば、これを「Knowledge」としてアップロードして対話するだけです。

せっかくなので、文書を分割して保存した場合と、そうでない場合とでのGPTsの挙動の違いを調べてみましょう。まずは、よりシンプルな単一テキスト版のものを作ってみます。もう慣れたものかもしれませんが、改めて作成の流れを確かめながら追っていきます。

GPTsを設定する（単一ファイルの場合）

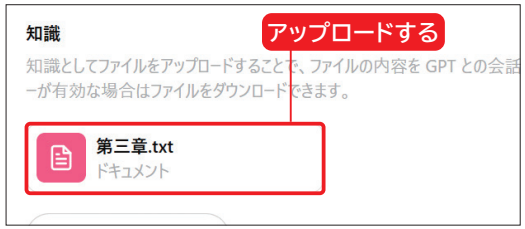
1 Sec.17を参考に新規のGPTsで「構成」領域を表示し、「機能」にある［コードインタープリターとデータ分析］のみチェックを付けておきます。

MEMO

チェックを付ける理由

今回の主題はKnowledge（知識）ですが、あとで「.zip」ファイル展開に必要なため、［コード インタープリターとデータ分析］をオンにしておきます（P.85参照）。

2 P.137でダウンロードした「第三章.txt」ファイルを「知識」にアップロードします。ここでは、単一の「.txt」形式ファイルを選択してください。



Column GPTsのコンテキストウィンドウ

「第三章.txt」は文字数にして約30,000文字程度の文書です。GPT-4oのコンテキストウィンドウは128,000トークン、英語ならば10万単語ほどに達する膨大な文字を理解できますので、今回のケースは必ずしもKnowledgeを要するものではありません。それでも、性能や計算量の観点からこういった手法を用いる意味はあります。ちなみに昔のGPTsに用いられていた言語モデル「GPT-4」ではこのコンテキストウィンドウが8,192トークンと頼りなかったために、当時のKnowledgeはその価値を今よりもずっと高くみられていました。

3 「名前」や「説明」「指示」などに入力します。ここでは、以下のような内容にしています。

名前
GPTsに詳しい人

説明
GPTsの各機能を解説してくれます。

指示
あなたはGPTs作成に関する書籍を解説してくれる人です。「第三章.txt」を読み、分かりやすく説明してください。

これでGPTsは完成しました。次に、対話して実際の挙動を確かめてみます。

GPTsを使ってみる

GPTs自体がChatGPTの一要素なので、知識をうまく答えられたとしてももとから知っていた可能性を否めません。多少ひねった質問をしたうえで掘り下げて、その出力を通常のChatGPTと、このGPTsとの間で比べてみます。最後に実際の書籍を参照して、もしGPTsだけが正解をしていれば成功というわけです。

以下のプロンプトを、質問として入力します。

Prompt

Actions機能で送信できるheaderの例を教えて。

Section

44 GPTストアとは

GPTストアでは世界中のChatGPTユーザーが各々の作成したGPTsを公開したり、他者のGPTsを利用したりすることができます。

GPTストアとは

GPTストアは、ユーザーが自身の作成したGPTsをWeb上に公開するための公式プラットフォームです。利用方法については、Sec.45を参照してください。

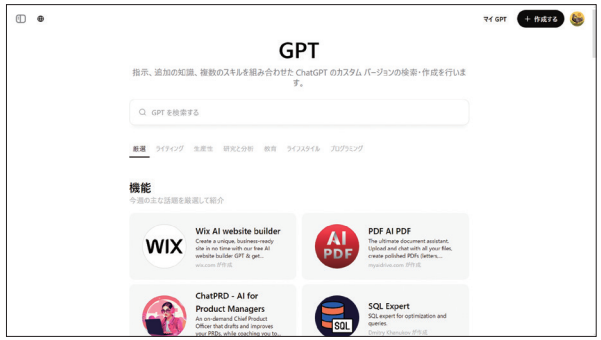
GPTストアを用いることで、外部のSNSやサイトなどを介さず、ChatGPT内で直接GPTsを共有することが可能です。また逆に、誰かが作ったGPTsをすぐに利用することもできるようになっています。

GPTストアにアクセスする

GPTsの作成を始める前に、ほかの誰かが公開したGPTsを試しに利用してみるのもよいかもしれません。GPTストアへは以下の手順でアクセスすることができます。

1 ChatGPTのサイドバー上部にある[GPTを探す]をクリックします。

2 GPTストアにアクセスできました。興味のあるGPTsがあれば、クリックすることでアクセス可能です。



GPTストアのGPTsを利用してみる

GPTsといえども基本的な使い方は普通のChatGPTとほとんど変わらないはずです。表示されている説明に従い、何か話しかけてみてください（Sec.45参照）。